

自然観光地開発におけるゲートウェイシティの景観形成のあり方に関する研究

A study of landscape management in nature-based tourism development in gateway cities.



愛甲 哲也

北海道大学大学院農学
研究院助教



小林 昭裕

専修大学北海道短期大学
みどりの総合科学科教授

1 はじめに

ゲートウェイシティとは、ゲートウェイコミュニティとも呼ばれ、アメリカで国立公園や国有林などの著名な自然レクリエーション地である公有地に近接する都市や集落をさす（Howe et al. 1997）。ゲートウェイシティが注目されるのは、自然レクリエーション地へのアクセスの拠点となるだけでなく、1980年代以降、移住者の増加により様々な問題が発生しているからである。

ベビーブーマーの退職に伴い、アメリカでは風光明媚な土地にセカンドハウスを求める需要が急増し、ゲートウェイシティに急激な変化をもたらした。旧来の住民と新住民の両者は、共にその魅力的な景観資源に強い愛着を抱いており、健全な経済発展を望んでいるが、多くの地域で情報の欠如や他の成功事例の参照もなく、貴重な資源と住民の生活の質が失われていると考えられている。

国内でも、交通結節点であるとともに、宿泊や食事・買い物等の活動を行う利用拠点、ゲート地区の景観が、観光客のイメージを大きく左右すると注目されている（国土交通省北海道開発局2006）。また、北海道内の自治体でも、人口の減少と税収の低下を背景に、首都圏などから退職者の移住を促進する活動をすすめている。すでに石垣島などでは移住者が増加し、景観上の課題も発生しつつある。ゲートウェイシティには、自然景観地に隣接または内包される場所として、風景や自然資源への配慮が必要と同時に、地域住民の利便性へも配慮したバランスのとれた開発が望まれている。

本研究では、ゲートウェイシティが今後こうむる可能性のある景観上の課題への対策を検討するため、ゲートウェイへのアクセスとなり、景観を楽し

む経路でもある道路からの景観、ゲートウェイシティ内から主要な景観ポイントを視対象とした場合の可視性の分析とそれを阻害する要因の抽出、観光客と住民のゲートウェイシティへの景観への意向の差異を把握することを目的とした。

2 山岳縦断道路における景観資源の発掘と継起景の形成

(1) 背景

道路周辺に広がる自然景観は、視点の設定や視対象となる森林と他の要素の取り合わせ・組み合わせなど、視点場である道路と視対象である自然環境との視覚的位置関係に配慮し、自然景観を演出し、来訪客に印象付けるデザインが求められる。

一方、景観は、視対象のみでは存在し得ない。視対象と見る人（視点）との空間的位置関係によって左右される視対象の周辺環境要素との関係および、視対象ならびに周辺環境要素とのバランスに対する審美的評価が成立した場合に、景観は初めて社会的に認知される。そのため、絵葉書やガイドブックの記述を通じて、車道を移動しながら眺める風景として、対象地周辺で風景的価値が高いと過去から認知されていた風景を収集し、その視点場、視対象などの空間的位置関係を把握した。道路からの眺めであることから、固定景と車窓などから移動中に眺めた継起景を分けて整理した。

(2) 固定景の視対象

道路からの眺めには、森林に代表される自然環境だけでなく、電線、道路標識、照明器具など、自然環境以外の要素も含まれる。道路からの眺望を考えると、道路は輪郭や形状が明確であり“図”にな

りやすい。地形の魅力が森林を主体とする自然景観の魅力に左右し、森林は背景、“地”となって、全体としての魅力を左右する。

阿寒国立公園阿寒区域（国道241号阿寒国立公園界～阿寒湖畔温泉～双岳台、国道241号分岐～オンネトー）において、かつて今も、沿道から見られる資源としては双湖台付近からパンケトーとペンケトーへの俯瞰（写真1）、双岳台から阿寒湖畔にいたる道路上からの雄阿寒岳の仰瞰、双岳台からの雄阿寒岳、雌阿寒岳への仰瞰であった。沿道から眺望される代表的景観には阿寒国立公園を特徴付ける火山、湖、針葉樹林及び針広混交林といった要素が含まれている。

阿寒横断道の沿道景観として論議すべき点は、林縁植生の扱いである。路傍植生には林内環境への緩衝作用を有することから、その点に留意しながら透かしのための間伐を行う工夫が求められる。

居心地のよい視点場づくりとして、休憩所、駐車場からの眺望点のデザインの検討が望まれる。オンネトーを手前に雌阿寒岳と阿寒富士を望む眺望、パンケトーとペンケトーを俯瞰しながら遠方まで広がる樹林を望む眺望などが、眺望点として整備されているが、その視点近傍の場として施設の形状、色彩、素材など、再検討する点が多い。

(3) シークエンシャル景（継起景）

継起景について、ドライバーの視線は常に路面の縦断方向に沿って前面にあるという点が前提条件となる。阿寒国立公園（国道分岐～阿寒湖畔温泉～双岳台）において、国道分岐→阿寒湖畔温泉→双岳台までは、阿寒湖畔温泉市街の手前で雄阿寒岳山頂部が姿を一瞬見せる。市街の脇を抜け、雄阿寒岳が正

面に見える。釧路への国道分岐を過ぎ、道路は雄阿寒岳山麓を縫うようにしながら徐々に標高を上げていく、その間、左右に針広混交林が見えるが、一方で、道路法面が目につき始める（写真2）。双湖台を経て双岳台までは、雄阿寒岳を視野に入れるのは双岳台手前の一瞬だけである。

逆方向に、双岳台→阿寒湖畔温泉→国道分岐に進むと、雄阿寒岳を右手前方に見え隠れしつつ進む。幾度か、雄阿寒岳が徐々に距離を縮め、大きな仰角で視野に入る。阿寒川を過ぎ斜面を登りきると、コンケイブした直線道路が広がり、この路線中で最もビスタ景（見通し景）と周囲の森林が映える。市街を過ぎ、登りの直線道路はフップシ岳に「山当て」されており、正面景としての山容が美しく映える。

調査対象とした区間距離は20km弱、時速60kmで通過すれば20分足らずで通り過ぎる。この程度の長さの区間はひとまとまりの区間として景観を扱う必要がある。共通の特性を持つ空間毎にまとまりを持たせ、それぞれの空間の景観資源の特性をより印象付けるようなデザインを行うことが求められる。双岳台から阿寒湖畔温泉への移動では雄阿寒岳が圍繞景観の特徴をもち、空間のオリエンテーションを容易にする。それゆえ、阿寒湖畔へ至る期待感の高まりを演出する方法として雄阿寒岳の眺めを効果的に使うことを考えてよい。

3 ゲートウェイシティにおける景観資源の可視性の分析

(1) 方法

阿寒湖畔温泉街は、阿寒国立公園の集団施設地区として指定され、宿泊施設・商業施設・住居がある（図1）。また、斜里町ウトロは知床国立公園の主要な



写真1 パンケトーの景観



写真2 車窓からの法面

利用拠点の一つであり、高台にはホテル群が立地しているが、公園区域外に位置している（図2）。

両地区において、建物や道路の位置のデータ、国土地理院発行50mメッシュデータをGIS上で重ね合わせた。主要な視対象である景観資源は、絵葉書やパンフレット等を収集し、さらに現地での概略踏査やヒアリング調査から抽出した。整理された地理的要因と視対象の空間的位置関係を把握するために、視対象を見ることのできる可視領域を算出した。

(2) 結果

a 阿寒湖温泉街

各視対象ごとに阿寒湖温泉街内での可視領域を算出した。「雄阿寒岳」への対象地の面積に対する可視領域の面積を求めたところ、94.57%であった。「雌阿寒岳」へは、西部の住居地域・商店街の一部・ほっけ散策路周辺が可視領域であり、可視領域面積は58.96%であった。「阿寒湖」の場合は、主な非可視領域が西部の国道沿いで、可視領域面積は88.61%であった。

しかし、実際に歩いてみるとそれぞれの視対象を見ることができる場所は限られている。地形データに現地で調査した建物の高さを加えると、「雄阿寒岳」「雌阿寒岳」「阿寒湖」の可視領域はそれぞれ77.35%、49.93%、50.95%と低下する。「雌阿寒岳」は、東側の国道の一部とエコミュージアムセンター周辺、居住地域の一部からでしか見ることはできない。「阿寒湖」は、主に湖岸でしか見ることはできない。湖岸沿いに大規模宿泊施設が立地していることが原

因で、阿寒湖を見ることができる場所は限られている。そのため、自動車で国道から湖を見る機会も限られる。今後は主要な視対象を視認できる視点場に関するドライバーへの情報提供ならびに視点場からの眺望特性について検討する必要がある。

b ウトロ

「亀岩」の場合、ウトロ高原全域、ウトロ東の内陸側、ウトロ香川の一部が非可視領域で、対象地の面積に対する可視領域の面積を求めたところ、36.94%であった。「オロンコ岩」への可視領域は、ウトロ高原で広がり、可視領域面積は51.37%であった。「神社山」へは主に海岸沿いが可視領域で、内陸側は非可視領域であった。可視領域面積は28.34%であった。「プユニ岬」へは主に海岸沿い、ウトロ高原、ウトロ香川の一部が可視領域であった。可視領域面積は46.89%であった。「知床連山」へは、ウトロ東の海岸部とウトロ中島全域、ウトロ香川の一部が非可視領域となり、可視領域面積は37.33%であった。

最も頻繁に車の行き来がある国道の周辺部は、視対象を見ることができる区間が多いことが示された。特にウトロ西は各視対象を満遍なく見ることができる。しかし、可視領域に属していても、目の前に看板が眺望を遮る可能性もあるため、この区域では主要な眺望対象への視野を確保し、阻害する要因について検討することが望ましい。また、ウトロは市街地内の岩が地名の由来ともなっていることから、その特質に留意した保全ならびに利用方策を検討しつつ、景観面からも観光施設を整備する際には高さ等に留意する必要がある。

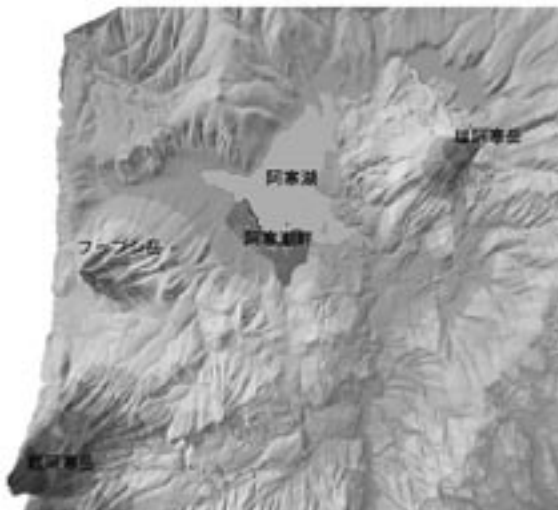


図1 阿寒湖と主要視対象

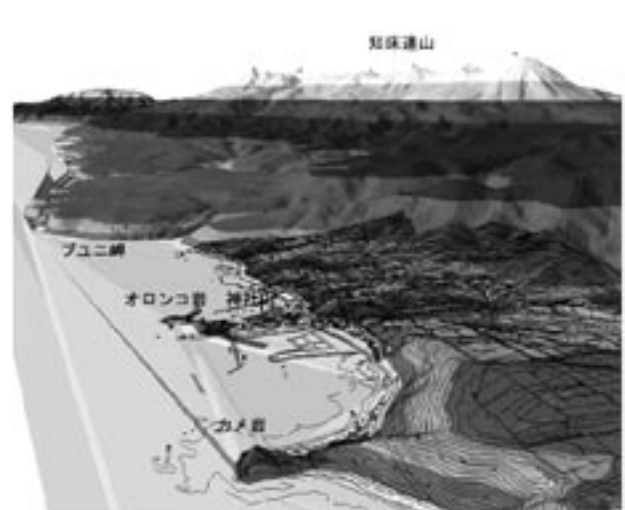


図2 ウトロと主要視対象

4 地元住民と観光客のゲートウェイシティ に対する印象

(1) 方法

知床国立公園のゲートウェイシティであるウトロ地区において、地元住民及び観光客の印象とそれに影響する景観要素を把握する意識調査を行った。観光客には、直接アンケート用紙を配布し、郵送にて回収した。213人から有効回答を得た。地元住民には、2007年3月に依頼文をつけた意識調査用紙と返信用封筒を北海道新聞朝刊に折り込み、配布した。101件の有効回答を得た。

観光客には、ウトロ市街地での過ごし方、初めて知床に来たと感じた場所を質問し、観光客と地元住民の両者に、知床らしい雰囲気を感じるもの、知床らしい雰囲気を損なっているもの、またウトロの街並みに今後何を望むか、といったことについて質問した。

(2) 結果

知床らしい雰囲気を感じるものとしては、海沿いの断崖が最も多かった。観光客では、野生動物、山並み、海、森林と続いたのに対して、地元住民では、市街地内の岩が比較的多くの回答者にあげられた(図3)。亀岩、オロンコ岩、ゴジラ岩といった市街地内に点在する岩の存在は、地元住民による景観調査においても魅力的なポイントとして取り上げられていた。他の建築物や看板類の存在により、その存在が気づかれにくくなっていることや、市街地を散策したという観光客が10%程度にとどまったことなどが、観光客の評価が低かった要因であると考えられる。

知床らしい雰囲気を損なっているものとしては、観光客は看板やのぼりの色、数を指摘した一方で、特にないと回答も30%に達した(図4)。地元住民は、看板やのぼりの数に加えて、宿泊施設の高さ・大きさ、路上駐車や電柱・電線の存在も指摘した。観光客に比べて指摘した比率も高く、景観的な問題への関心の高さがうかがえると同時に、高く評価された市街地内の岩の見え方を阻害している要因への不満が示された。

今後のウトロの景観に何を望むかについては、両者とも自然と調和した街並みを望む回答が大半を占めた(図5)。観光客に比べて地元住民では自然との調和にあわせて、清潔感や、ホスピタリティが強く意識されていた。

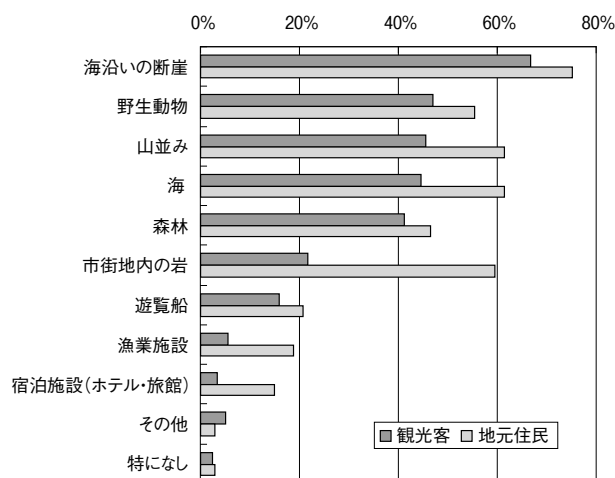


図3 知床らしい雰囲気を感じるもの

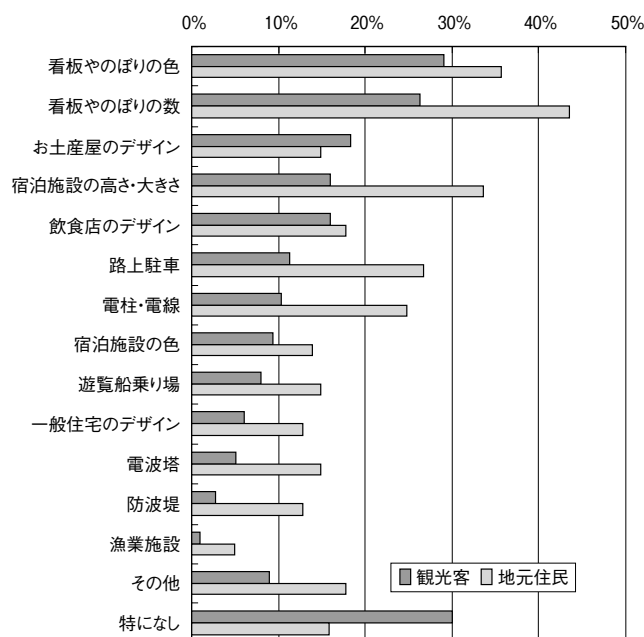


図4 知床らしい雰囲気を損なっているもの

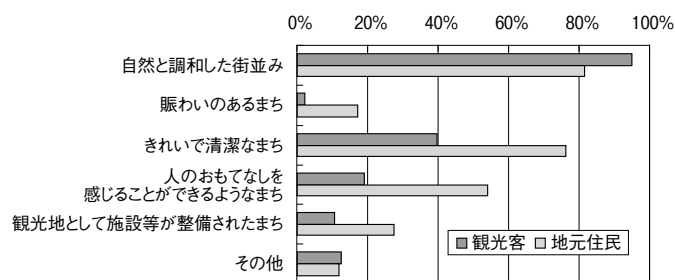


図5 ウトロの景観に望むこと

5 まとめ

ゲートウェイシティに到達する道路からの固定景について、居心地のよい視点場づくりとして、休憩所、駐車場からの眺望点のデザインの検討が望まれる。すでに眺望点の整備は行われているが、さらに視点近傍の場として施設の形状、色彩、素材などに再検討する点が多い。たとえば、阿寒湖畔へ至る期待感の高まりを演出する方法として雄阿寒岳の眺めを効果的に使うことを考えてよい。さらに、メリハリや強調のためのリズム感やテンポが重要となる。

阿寒湖畔では、実際に歩いてみるとそれぞれの視対象を見ることが出来る場所は限られている。実際に眺望を阻害している建築物と森林について、興味対象との関係からの整備が求められ、さらに主要な視対象をより効果的に見せるための工夫を検討する必要がある。可視領域に属していても、目の前の看板が眺望を遮る可能性もある。地理的条件において景観的に主要な地点は重要な視点場として整備していくことが望ましい。また、ウトロの市街地の岩は、地元住民の関心は高いものの、観光客はあまり認識していない。観光施設を整備する際には、岩など主要な自然要素との調和に配慮する必要がある。

ウトロにおける観光客と地元住民に対する意識調査からは、ゲートウェイシティが観光客の関心の対象とはなっておらず、地元住民からは景観の改善が多く望まれていることがわかった。特に、看板やのぼりの色や数、宿泊施設が知床らしい雰囲気を持っていると指摘され、広告物や建築物の規制が必要だといえる。さらに、市街地の岩など、特徴的な景観をひきたたせ、ゲートウェイシティとして魅力ある景観づくりが求められている。さらに、ドライバーから見た場合、ゲートウェイシティと公園内の道路は、沿道景として連続することから、継起景としての特性について、今後検討する必要がある。

ウトロのように魅力的な自然景観をもつ地域に隣接して、交通の結節点、利用拠点となっていながら、何ら景観的な規制が行われていない事例は北海道内に少なくない。景観法による準景観地区の指定による建築物の規制をはかることも有効である。さらに公園の内外をシームレスにつなぎ、地域として景観づくりの方向性を示す総合的なビジョンの構築が望まれる。

参考文献

- 国土交通省北海道開発局（2006）『世界自然遺産「知床」圏域の都市景観形成調査報告書』、国土交通省北海道開発局
- （財）日本交通公社（2002）『阿寒湖温泉再生プラン2010—阿寒湖温泉活性化基本計画—』、阿寒湖温泉活性化戦略会議
- （株）シー・エス・ピー・ティ地域計画機構（2005）『斜里町魅力ある景観づくり基礎調査報告書（概要ピックアップ版）』
- Howe, J., E. McMahon & L. Propst（1997）*Balancing nature and commerce in gateway communities*: Island Press, Washington D. C..

profile

愛甲 哲也 あいこう てつや

博士（農学）。鹿児島県出身。北海道大学農学部卒業、大学院環境科学研究科修了。北海道大学大学院農学研究院助教。レクリエーションによるインパクトの把握と、自然レクリエーション地の管理について研究している。（財）日本造園学会北海道支部常任幹事、北海道都市地域学会理事のほか、市民団体「山のトイレを考える会」事務局長などを務める。

小林 昭裕 こばやし あきひろ

博士（農学）。富山県出身。北海道大学農学部卒業、大学院環境科学研究科修了。専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授。利用体験に基づく自然公園の管理、農村景観の保全と整備を通じた地域振興などの研究に取り組む。（財）日本造園学会北海道支部支部長、北海道自然環境保全審議会副会長、知床適正利用計画検討委員会委員などを務める。